

言語間の距離で習得難度は決まる

日本人が英語ができないのも一つの理由に、英語と日本語はかなり異なつた言語である、ということがあります。当たり前の話ですが、学習者の母語と、学習対象となる言語が、似ていれば似ているほど、学習はやさしくなります。日本語と英語は、言語の系統的にもかなり異なっており、たとえば、英語と同じインド＝ヨーロッパ語族に属する言語を母語とする学習者にと比べると、日本人学習者はかなり不利になります。もつと極端な例をあげると、ふつうは別の言語ととらえられている言語でも、実はかなり似ている場合があります。たとえば、同じロマンス語に属するスペイン語とポルトガル語は、語彙も文法も非常に似ているので、お互いの言語を知らなくても、なんとなくコミュニケーションがとれてしまう一方で、実際、日本に留学しているスペイン人とブラジル人(ポルトガル語話者)がお互いに自分の母語を使って会話をしているという話を

2 日本人はなぜ英語が下手なのか——その2 母語の影響

表1 アメリカ人学習者が週30時間の集中コースで上級レベルに達するまでに必要な学習時間

44週	アムハラ語, アラビア語, ベンガル語, アルガリア語, ビルマ語, 中国語, チェコ語, タリ語, フインランド語, エリツァ語, ヘブライ語, ヒンディー語, ハンガリー語, 日本語, 韓国(朝鮮)語, ラオ語, タガログ語, ポーランド語, ロシア語, セルボネクroat語, タイ語, トルコ語, ウルドゥー語
32週	インドネシア語, マレーシア語
24週	アフリカーネズ語, デンマーク語, オランダ語, ノルウェー語, ポルトガル語, ルーマニア語, スウェーデン語, フランス語
20週	フランス語, イタリア語, スペイン語

(T. Odlin, *Language Transfer*, 1989, p. 39 より再構成)

聞きました。そのような場合は、第二言語として学習するのも楽なことはいくらまでもないでしょう。日本人にとって英語が難しいのと同様に、アメリカ人の学習者が日本語を学習するのはものすごく大変です。それに比べて、アメリカ人がスペイン語とフランス語を学習するのはずっと楽です。アメリカ国務省の外交官養成機関である Foreign Service Institute の一九八五年の資料によると、アメリカ人が日本語をかなりのレベルで使えるようになるのには、アメリカ人がスペイン語をかなりのレベルで使えるようになるまでの時間の倍以上かかるということです。

日本人は韓国語なら、すぐうまくなる？

では、日本人が学びやすい言語はなんでしょう。民族的には、日本語の起源はまだまだはつきりせず、

アルタイ諸語の一つであるとか、オーストロネシア語族であるとか、両者の混合であるとか、諸説があります。ただ、似ている言語といえば、なんといっても韓国(朝鮮)語です。文法が驚くほど似ています。韓国ドラマのゲームで韓国語を学習する人が増えたようです。文法が、韓国語なら、英語よりも少ない学習時間である程度使えるようになるという予測ができます。それから、中国語は、音声、文法に関しては有利でなくとも、多くの漢字を共有しているため、語彙の習得がかなり楽になることが予測されます。ただし、これらの予測について、実際にやさしいのかどうかを比較した実証研究は、今のところありません。

その逆を調べた調査があります。カーネギーメソンの甲田慶子は、日本語学習者を韓国語、中国語、英語の三つの母語グループに分けて比較しました。すると、初期の段階ですでに、英語話者は韓国語話者・中国語話者に差をつけられて、しかもこの差は学習が進むにつれてさらに広がる、という結果が出ています。

このように、母語と対象言語のあいだの距離によって、習得難度はかなり決まってくるのですから、日本人は英語ができないことを恥じる必要はそれほどないといえます。

言語転移

このような、第二言語習得における母語の影響は「言語転移」もしくは「言語間における影響」とも呼ばれています。簡単にいえば、第一言語からの第二言語に対する影響です。学習者がすでに二つの言語を知っているとしたら、三つめの言語を学習するときに当然、既知の第一言語と第二言語からの影響が生じます。どちらも言語転移ですが、後者は第一言語から第三言語への転移ということになります。

たとえば、筆者が大学でスペイン語を第二外国語として習ったときには、日西辞典ではなくて英語-スペイン語の辞書を買ってきて、英語からスペイン語に置き換えるという作業をいつもやっていました。日本語とスペイン語ではかなり構造が違いますが、スペイン語は文法も単語も日本語よりはるかと英語に近いので、すでに知っている英語を使って、「英語からスペイン語へ」という戦略をとったほうが効率がよいからです。

転移は言語に特有の現象ではない

さて、転移という現象は、言語習得にかぎらず、学習された他のスキルについても観察されます。

たとえば、筆者は子ども時代に卓球を毎日のようにやっています。大学生のときに

初めてテニスをしたのですが、フォアハンドで打つときに卓球するようにラケットを握ってテニスを打つてしまつたのです。そうすると、近くのボールを打つときはいのですが、遠くのボールを打つときに発射に走らなければなりません。

これは、卓球での体の動きがかなり自動的なものになっていたので、テニスのラケットを握っているときにも卓球のスキルが干渉したのだ、とみることができるよう。このように、ある行動がそれと似た行動をするときに転移する、というのは日常生活のあらゆる場面でみられます。そして、それは何度も何度もくり返しておこなったため自動的になったものほど強いようです。

母語にもらない普遍的な習得順序はあるか

ところで、第二言語習得研究の歴史の中で、第一言語の誤りは、すべて第一言語からの影響であるというようなことが言われていた時代がありました。そうではないということも、その後の研究が明らかにしたわけですが、その反動からか、一九七〇年代になつて今度は、文法形式の習得順序は普遍的で、すべての学習者が母語に関わらず同じレベルをたどる、ということが強調されるようになりました。主に英語の文法形式(たとえば、冠詞^aと^{the}、複数形^s、過去形^{ed}の^ななどの)の習得順序がどうなっているか

ジョンの本
John's book

ところが、所有のsについては、
この現象は次のように説明できます。日本語には、英語のような複数形がありません。
まり、「所有のsは複数のs」というのが日本人学習者の習得順序なのです。
ところが、所有のsについては、
ジョンの本
John's book

というように、日英語間の所有表現の対応関係は非常に簡単であるため、日本人学習者にとって習得が容易であるというわけです。このことを一九八三年に最初に指摘したのがカリフォルニア大学ロサンゼルス校のロジャー・アングラーセン(Roger Andersen)で、その段階ですでに、日本人学習者とスペイン人学習者の違いを比べて、クラシェンの習得順序は単純化しすぎていると指摘しています。

その後、発表された研究をみると、アングラーセンの主張を支持する結果が出ているので、かつて普遍的と考えられていた習得順序にも実は個別的なところがあることがわかっています。言語習得には、普遍的な部分と、個別的な部分があって、その個別的な部分に第一言語の影響が当然入ってくるようになります。

日本人の女の子では、この順序が逆で、所有のsのほうに先に習得されたのです。普遍的習得順序を主張するクラシェンは一九七八年の論文で「それは単なる例外だ」といってこの例を軽視しているのですが、あとからさまざまな研究者、特に日本人の研究者が、日本人学習者の習得順序を調べてみると、ほとんどみんなこのパターンでした。つ

賢二(現スタンフォード大学)が研究した、ウグイスという鳥の鳴き声の録音テープを聴いたとき、日本人の女の子は「あれは鳥の鳴き声だ」といって、そのテープを聴いた後、テープを聴いた場所を指さすという行動を示した。これは、日本人の女の子は、この順序が逆で、所有のsのほうに先に習得されたのです。普遍的習得順序を主張するクラシェンは一九七八年の論文で「それは単なる例外だ」といってこの例を軽視しているのですが、あとからさまざまな研究者、特に日本人の研究者が、日本人学習者の習得順序を調べてみると、ほとんどみんなこのパターンでした。つ

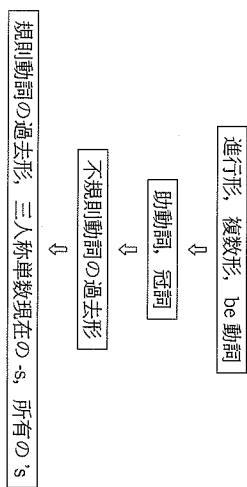


図3 クラシェンの提案した普遍的習得順序

日本人に特有の習得順序

ところが、この「普遍的」習得順序に合わない事例が報告されています。当時ハーバード大学の学部生だった白田賢二(現スタンフォード大学)が研究した、ウグイスという鳥の鳴き声の録音テープを聴いたとき、日本人の女の子は、この順序が逆で、所有のsのほうに先に習得されたのです。普遍的習得順序を主張するクラシェンは一九七八年の論文で「それは単なる例外だ」といってこの例を軽視しているのですが、あとからさまざまな研究者、特に日本人の研究者が、日本人学習者の習得順序を調べてみると、ほとんどみんなこのパターンでした。つ

かなり極端な主張も現れました。たとえばこの普遍的順序によれば、英語の習得では、複数のsのほうに先に習得されて、それから所有のsが習得されるといふことになりました。南カリフォルニア大学のステイブ・クラシェン(Steven Krashen)はこれを普遍的な習得順序の一部だと主張しました。

言語転移はいつおこるか

さて、言語転移は、つねに現れるわけではありません。第一言語の影響が現れる場合と現れない場合、もしくは現れやすい場合と現れにくい場合があるわけです。そして、どのようなときに第一言語の転移がおこりやすく、どのようなときにおこりにくいか、すなわち、言語転移がおこる条件を予測することが、言語転移研究の中心的な課題です。なわち、言語転移がおこる条件はいくつかあります。たとえば学習環境について言うと、外国語を讀んで訳すという「文法訳読方式」中心で教えているところでは転移がおこりやすく、それに対して学習者の母語を使わず、主として学習対象言語によるコミュニケーションを通して教えているところでは転移がおこりにくいとされています。

無理して話すときと母語が身につく

また、スピーキングを強制すると転移がおこりやすいということも言われています。前出のクランシェンが言ったことですが、学習者の外国語能力がまだ一定のレベルに達しないうちに、無理に話せると、結局学習者は母語に頼って、その母語の文法に適當に第二言語の語彙をくっつけて、なんだか変な外国語をしゃべる、という状況になります。場合によっては仕方がないので、それをどんどん続けていくと、それが固まってしまう

典型的と思えるものだけ直訳する

まうということがあるのです。ある程度の基礎もはいうちから、どんどん英語でコミュニケーションすると、いわゆるグロウオン・イングリッシュになってしまふということ。この点には注意しておく必要があります。たとえば、かなり英語ができる日本人でも、「How do you think about it?」と言ったとせば、かなり英語ができません。これは、日本語の「どう思いますか」を直訳した表現だと思われれます。「What do you think about it?」という正しい形が身につく前にこの表現を直訳で使い始めてしまったために、それが固定してしまつたのでしょう。

言語転移に関するもう一つの要素は、「典型性」の問題です。実は、筆者が第二言語習得に興味をもつたのは、この辺りがきっかけなのですが、オランダのナイメーヘン大学のエリック・ケランマン(Eric Kellerman)は、一九七〇年代後半から八〇年代前半にかけて、言語転移に関して非常に面白い一連の研究を行いました。オランダ語の break という動詞は英語の break と語源が同じで、この動詞をいろいろな文脈で使うことができるという点でも英語とかなり似ています。そこで、オランダ語を母語とする英語学習者に、break a cup(カップを割る)と英語で言えるかどうかを

判断させてみると、ほとんどの人が「言える」と正しく予測します。ところが、break his heart(彼の心を傷つける)と英語で言えるかと尋ねると、「これは言えない」と予測する学習者が非常に増えます。実際には、オランダ語と英語のどちらでも言える表現です。

この現象には、「典型性」もしくは「プロトタイプ性」とよばれるものが絡んでいます。break a cup という用法は、break の使い方の中で典型的、基本的なものであるのに対し、break his heart という用法は非典型的なものであるから、こういう結果が出たのだ、という説明ができます。つまり、学習者が自分の母語から外国語に訳すときに、なんでもかんでも逐語的に訳すわけではなくて、自分が典型的と思っもののみを第二言語に直訳する、というわけです。

また、この典型性の問題は、語彙にかぎらず、文法にもあてはまります。It is easy to please him. と He is easy to please. はほぼ同じ意味(彼を喜ばせるのは易し)ですが、学習者は、前者のほうが後者よりも基本的で、第二言語にも直訳できる、という判断を下す場合が多いのです。

Give me a break = 休みをください?

しかし、何をもって典型的とするかという点、またいろいろ問題があります。これに反するような、非常に面白い例を友人から聞いたことがあります。

日本語を学んでいるアメリカ人の学生が、先生が大量の宿題を出したときに、その先生のところへ文句を言いに来て、「先生、休みをください」と言ったそうです。英語では“Give me a break.”です。「冗談じゃない」と、文句を言うようなときに使う表現です。この学生は、これをそのまま直訳して、「休みをください」と言っただけです。

たしかにこういう学生もいます。これは、個々の学習者が好む戦略(ストラテジー)とも関係していて、一対一対応の逐語訳の好きな学生もいるわけです。そういう学生は、とにかく直訳したら通じるだろうと思っ、先生に、“Give me a break.”のつもりで「休みをください」と言うようなこともあるでしょう。それを聞いた先生は、「なんで休みが必要なのか、あ、宿題がたくさんあるから、宿題をやるために休みが必要なのか」と思ったかもしれません。

この事例は、先ほど述べた「無理して話す」と変な英語が身につく」という問題とも関係しています。また自分の使えないような表現までなんでもかんでも第一言語から第二言語に逐語訳すると、だままだま正しい表現になる場合もありますが、こんな感じで変な表現になっってしまう場合もあります。外国語の力が不十分なら、話したり書いたりす

三言語間のマッピング

さて、どういふときに言語転移がおこりやすいか、話の続きとして、「言語間のマッピング」の影響をとりあげましょう。これはどういうことかという点で、「第一言語と第二言語の対応関係がはっきりしているものほど、転移がおこりやすい」ということであります。たとえば「ジョンの本」と「John's book」は、対応関係が非常にはっきりしています。だから転移がおこりやすくなります。

第一言語の影響が出やすくなります。これは、学習者が言語学習以前にもっている言語に関する知識(たとえば、英語とオランダ語は似ている)も影響しますし、学習開始後に気づく場合もあるでしょう。日本語と韓国語が似ている、と知らないで韓国語学習を始めても、すぐにそのことに気づいて、正の転移を最大限活用するのが学習者の知恵だともいえるでしょう。別の観点からみれば、第一言語と第二言語の距離が近いほど、負の転移よりも正の転移の割合が多くなり、そのため学習が容易になる、ということでもあります。

三言語間の距離が近いほど転移がおこりやすい

もし直訳がうまくいくのであれば、学習しているうちに「あ、これは直訳しても大丈夫だ」と学習者は気づきます。このように、第一言語と第二言語の距離が近いほど、

正の転移と負の転移

る際には、こういうことに対して注意を払っておく必要があるでしょう。

言語転移がなんでもかんでも悪いわけではありません。今みた例では、「休みをください」というのは、母語の影響で間違った表現になっています。この場合は、「負の転移」といわれます。ところが、英語でも日本語でも、同じような表現を使う場合があったら、そのまま訳せばいいわけです。この場合は、「正の転移」になります。どちらの場合も、心理的プロセスは同じですが、結果が正しい場合と間違っている場合が出てくるのです。

前に、ドイツ人が英語を学ぶのはやさしい、という話をしましたが、それはドイツ語が母語で英語が第二言語の場合、よく似ているので、「正の転移」になることが多いからです。あまり深く考えずに直訳してあげば、だいたいうまくいくのです。

発音は母語の干渉が強い

breakは「こわす」以外に、「破る」(break a rule/record/promise)とか、「割る」(break a glass)とか、いろいろな日本語に対応するのですが、学習者はとりあえず「break=こわす」といった対応をつくらなければならない。ですから、言葉に関しても、転移が大きくなります。それに対して、文法に関しては、そう簡単に一対一対応をつくらなければならないので、転移は少ないということが考えられます。

さらに、音声も母語の干渉が非常に強い分野と考えられています。母語の干渉が非常に強いため、発音の特徴から、母語が推測できるほどです。たとえば、アメリカ映画で、英語を母語としない登場人物が出てくると、それがロシア人だったり、メキシコ人だったり、中国人だったりするので、それぞれの特徴的なまわりを使得って英語を話すのです。もちろん、実際の役者はその母語の話者とは限らず、アメリカ人だったりするわけですが、もう一つ(悲劇的な)例をあげると、一九三三年におきた関東大震災の後、朝鮮人が暴動をおこす、というデマが流され、その結果、多数の朝鮮人が虐殺されるという事件がありました。その際、朝鮮人かどうかを調べるのに使われたのが、この「発音における

母語の干渉」なのです。「十百五十銭」と発音させると、朝鮮語には無声音と有声音の区別(たとえば、kとg、pとb、tとdの区別)がなく、「ジエ」の音も独立した音の単位(音素)としては朝鮮語にはないので、だいたいの朝鮮人はうまく発音できません。日本人に英語のLとRの区別ができないのも同様です。日本語では、Lの音もRの音も区別されないで、日本語の母語話者がこの区別をするのは容易ではありません。これは、発音するときに区別するのが難しいだけでなく、聞き取りでも区別が難しいのです。この日本人のLとRは、第二言語習得の世界では有名な話で、かなりの研究が行われています。日本人には、rice(「米」とiie(「シラミ」の複数形)のような区別ができません、という研究はもちろん、この二つの音を区別させるような訓練をすると弁別能力が向上する、といった研究も多数あります。

たとえば、カーネギーメロン大学心理学科のジェームス・マクランブ(James McQuarrie)も、LとRの訓練実験を行ってその効果を確認しており、筆者がカーネギーメロン大学を訪れた際も、こちらが日本人であるということで、熱心にその話をしてみました。(余談ですが、ジェームス・マクランブは認知科学の分野では第一人者の人として知られており、あとで出てくるコネクショニズムというコンピュータモデルを使った認知研究のリーダーです。)

しかしながら、彼らの訓練実験はすべて、実験室という限られた環境で、意味を無視した形で行われており、訓練にどの程度美上の効果があるのかは、まだわかっていません。たとえば、読者のみなさんにも、注意していただければ、LとRの発音をすることはできる人が多いのではないのでしょうか。この二つの音の発音の仕方は、中学校の英語で最初に習うことですから、知識としては知っているのですが、やればできます。難しいのは、実際に会話の中で区別することです。この「注意を向けなければならない」という問題については、また第4章で詳しく述べます。

文化も干渉するか

言語と文化は切っても切れない関係にあります。言語と文化・思考の関係をめぐってはさまざまな議論がありますが、外国語学習というレベルでは明らかに干渉してきます。たとえば、日本人には、謙譲の美徳、という文化的価値観がありますが、これが私たちの外国語学習にも影響してきます。日本人は、ほめられたら、「いえいえ」とんでもないです」などと言って、いちおう拒絶する傾向があります。ところが他の文化では、これが奇妙に映る場合もあるのです。筆者が初めてアメリカに行ったとき、面白い経験をしました。そのころすでにある程

度英語かできたので、「Your English is very good.」など、「何度もほめられるのです。ところが、そのたびに、「No, no, my English is not good.」などと言って拒絶していただちよっと雰囲気気まずくなりまりました。どうしたのかと思っていると、ホームステイ先のホストファミリーから、ほめことばを受け入れなければだめだ、と言われました。ところがこちらにはなんと書いていいかわからない。聞いてみると、「Thank you.」と言っておけばいい、というのです。それで次から、ほめられたら、「Thank you.」と書くことにしたら、スマーズにきました。謙譲の美徳をもつ日本人としてはやはり心が痛みました。何度も言っているうちに慣れましたが。

逆に日本語を学ぶ外国人にとっても、これは重要です。このことについてはこう教えられているようで、日本語を上手に話す外国人に「日本語、上手ですね」と言っていると、「いえ、まだまだです」などという返事がかえってくるのがよくあります。

このような文化的背景に根ざした言語転移の問題は、「語用論的転移」もしくは「社会言語学的転移」などよばれ、かなりの研究があります。「謝る」「断る」「依頼する」「ほめる」など、さまざまな言語行動(専門的には「発語行為」といいます)について、これらが異なる文化でどのように表されるのか、またある言語の話者が第二言語の発語行為をどのように行うか、などの研究が行われています。そして、わかってきたことは、

文化的なものがかなり転移する、ということですが。発音、語彙などと同様、文化的知識も転移のおこりやすい領域だといえるでしょう。

ただし、このような価値観まで学習する必要があるのか、という議論はあるようです。というのは、これはある意味では対象言語の文化を学習者におしつけることになるからです。また英語のように国際語となっている言語を学ぶ場合、日本人が韓国人と英語で会話する場合もあるわけで、そういった場合は、じゃあ、英語の価値観というのは何だ、ということになります。また、アメリカ人とイギリス人のあいだにも文化的にかなり違いがあるようです。

結論をいえば、文化的背景についての学習の重要性は学習の目的による、ということになるでしょう。しかし、場合によっては、非常に重要な知識になるということには注意しておかなければなりません。というのは、文法や発音の間違いというのは、はっきりしているため、この人はまだ外国語ができないのだな、と思われただけですみます。しかし、単語や文法や発音に関してはかなりの上級者で流暢に話せるのに、文化的に異なる言語行動をして、それがその文化でよくないものであれば「失礼なやつだ、いやなやつだ」などと思われる危険があり、また学習者はそのことに(ふつうは)気づかないかからです。その危険の大きさを考えれば、相手の文化について基本的なことは知ってお

くたいと思います。ただ、いろいろいってしまえば、また文化を無視した言語学習というのも味気ないので、そのことを考慮に入れて、個々の学習者や外国語教育プログラムが柔軟に対応していけばよい